
思い出

紫藤なごみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出

【コード】

N9459D

【作者名】

紫藤なごみ

【あらすじ】

カミキアスコ
神木明日子は平凡な毎日を送っていた。そのことにどこか嬉しさを感じつつ、しかし焦りに似たものを感じずにもいらなかった。そんなある日、電車の中で迷うように自分に向けられる一視線に気付く…。

第1章 - 1

一般的に、新年を迎えた心境というものは悪くはないのだろう、とぼんやり思った。

例えば今年は何を頑張るぞとかやってやるぞとか一年発起してみたり、今年は何があるのだろうとワクワクしてみたり。

しかし明日は憎らしいほどに晴れ渡っている空を見上げて、盛大なため息をついた。

今日はまだ新年といえる日付で、まして良い天気。

彼女の視界に入ってくる人々は大概家族連れかカップルたちばかり。別段それに対して思うことはないのだけれど、しかし人々が新年に対して抱いている期待というものをもてない自分は、どこかすれているのかもしれないと少しばかり思っていたりする。

去年も今年も来年も、きつと変わらぬ時間が自分の周りを流れていくのだろうと、決め付けるように思っている。

けれど彼女も29歳。今年、30歳になる。

年齢でどうこうあってたまるものかと必死に自分を応援してきた。

今の時代、いろんなライフスタイルの人がいるじゃないと思いついてきた。

周りの友人たちからは結婚の報告が届く。子どもの写真入りのハガキが届く。

それらを羨ましいなんて思ったことはない。だって、私は私だもの、まだ仕事を頑張りたいのだから。

母親の意味ありげな視線をかわしながら彼女はお祝いの返事を書いたものだ。

でも。いろんなライフスタイルがあるとってはいたけれど、人の人生の流れは大まかには決まっているものだと思っただけで、義務教育を終えたら高校に進学して、その後はいくつかの道に分かれてもその後は結局就職することになって、そしてある程度の年齢になったら結婚して家庭を持つ。能動的にならなくても、自然と向こうからやってくるものだと思っ

ていた。

ぼんやりしている彼女の前を通り過ぎた高校生ぐらいのカップル。

手をつないで身体を寄せ合って笑いながら去っていった。

それを目で追ってしまったのはなぜだろう。

そして続けて通り過ぎたのはまだ小さな赤ん坊を抱えた夫婦。

あの赤ん坊が成人する頃、私は50歳なのねと計算してしまうのはすでに日常茶飯事化している。

不変が好きだ。

元々アドリブは下手で、突発的なことが起こるとあたふたして訳の分からないことをしてしまい失敗したことも多々ある。

だから毎日ほぼ同じことを繰り返しているこの生活を維持したいと思っ

ていることに嘘はない。

朝早く起きて、仕事に行って、帰って寝る。

休日は目が覚めるまで思う存分寝て、何もせずに過ごし、趣味のゲームをする。

恋に憧れたことがないとはいわない。

自分ばかりと熱しやすくしかし冷めやすい方だ。

ふと時計を見た。

まずい、もうすぐ電車の来る時間だ。

しばしばんやりしていた間も確実に時は流れ、彼女はまた少し、 3

0歳に近くなった。

もう一度大きなため息をつく。

こんな気持ちになるのは年齢のせいだけではないと思うのだけど。

だがはつきりすることのできない不確定な結論を思考の中に留めたまま、彼女は駅に向かって走り出した。

第1章 - 2

平日毎朝同じ電車に乗っている。

いつもは息苦しく感じる電車内も、時期柄空いているということだから余裕がある。

見知らぬ他人の間に挟まれもまれながら通勤している普段が嘘のよう。

今日は、乗ったその時から座ることができた。

明日子の勤める会社はそれほど大きくはないが、正月休みはたった3日間しかなかった。

故に今こうして電車に乗っているわけだが、周りを見た限り自分のようにこれから仕事に向かうであろう人たちの姿は見当たらないように思えた。

悪いことをしたわけではないのに他人相手ということでごっそり伺い見る。

そして勝手に予測して決めつける。

あの家族はこれから買い物に行くんだ。あのカップルはこれから遊園地。

それからあの学生は…。

私服姿の眼鏡をかけた一人の男性。

大きなカバンを持っているからきっと学生。

そういうことにして、彼をもう一度チラリと見る。

真っ直ぐに目が合った。

明日子は慌てて俯いて視線をそらした。

見ず知らずの他人にじろじろ見られるって嫌だよね…。

分かっただけでそれをやっている自分のことはさておき、彼女の鼓動

は大きく波打ち、収まらない。
満員電車なら不可抗力で視線を逃がすことができないことはあつても、

まだまだ空席が目立つほどに閑散としているこの状況で、彼にもし何かを言われたら逃げられない。

明日子は降車する駅に着くまで、一度も顔を上げられなかった。

電車を降りて、電車が駅を出発して見えなくなってから、ようやく彼女は後ろを振り返った。

勿論そこに彼はいないわけで、そもそも明日子が悩む必要はなかったのかもしれない。

たまたま目があっただけかもしれないのに。

けれど妙に緊張してしまったのは、多分彼が真っ直ぐに自分を見据えていたから。

少なくとも明日子にはそう見えた。

過剰反応だつて分かつてるのよ。

誰にも言えないけれど、明日子は彼氏いない歴が年齢と比例する。

となれば続く経験もないわけで。

友人や同僚たちの前では見栄を張って作り話を並べ立ててはいるが、所詮それは雑誌やテレビから得た知識によるもの。

明日子は一つ、長いため息を漏らす。

この路線の沿線には大学もなければ図書館や予備校もない。

だとすれば彼はこの電車を普段から使っているわけではないだろうと、明日子はそつとさっきの続きを勝手に考える。

眼鏡をかけて大きなカバンを持った学生風の男性。

いつもならすぐに忘れてしまう他人の顔を、今回に限って覚えているのは偶然。

一生のうちでいつ誰に会うかなんて、すべてが偶然の賜物だもの。
いろいろと都合よく解釈してくれる自身の思考に苦笑して、明日子
は線路の続く果てをしばし見つめていた。

第1章 - 3

自分にその気がなくても、周りが勝手に変化して影響を及ぼして
ることなんてよくあること。

翌日、いつもと変わらぬ電車、車両に乗り込んだ明日子が見たもの。
それは、昨日見かけた彼。

自分がこの時間のこの電車、この車両に乗って通勤しているように、
同様の事例なんてとてもありふれている。

彼のことはたまたま昨日印象があったから覚えていただけで、特に
感情はない。

けれど少し気まずさを感じた。

明日子は彼に背を向けて立つ。

今日は昨日よりこんでいるような気がする。

だが、移動できるスペースがないわけでもないのに、明日子は緊張
しながらもそこにいる。

どうして緊張するのかなんて、今更考えるまでもない。

その時、電車が大きく揺れた。

つり革につかまっていたけれど身体がバランスを崩した。

明日子は身体の状態を戻しながら、不意に後ろに視線を向けた。

彼と、目が合った。

しかしその途端、彼がすぐさま顔をそむけた。

偶然でしょ？

今電車が揺れたし。視線なんてキョロキョロ動かすものだし。

そう思いつつ、再び彼に背を向けた明日子の鼓動は、大きく波打っ

た。

人というものは一度気になると、よほどのことがない限りそれを振り払うことはできないものだ。

明日子はしばしたって不意に手鏡を取り出し、身だしなみを直す振りをして自分の後ろを鏡に映した。

鏡に映ったのは、こちらを見ている彼だった。

明日子は周りに、彼に悟られないよう驚く。

不自然にならぬよう手鏡を動かして手櫛で髪をすいてみたりするが、しかし鏡に映る彼は時折目を伏せて視線をそらすものの、すぐに明日子に戻ってくる。

そして真っ直ぐに彼女の後姿を見ているのだ。

なんだか妙に恥ずかしくなって、明日子は手鏡をカバンにしまう。

恐らくこの瞬間も彼は自分を見ているのだろう。

自意識過剰だなんていえない。

今自分の周りには誰も立っていない。

となれば、やはり彼は自分を見ていたのだ。

私、何もしてないわ…多分。

そう、記憶が正しければ彼と初めて『会った』のは昨日だ。

勝手に人となりや今後の行動などを想像してしまったけれど、それは問われることじゃないでしょう？

一瞬目が合った時もすぐにそらした。

それも相手を不快にするほどの行動ではなかった、はず。

一応、自分の身だしなみを見直してみた。

別段おかしくはない、と思う。

まもなく駅に到着するという車内アナウンスが入る。

大きく波打った鼓動をなんとか押さえ込もうとしたがうまくいかな

い。

生憎彼の立っている側にあるドアが開いたので、気になる鼓動を抱えたまま彼女は彼の前を通って電車を降りなければならぬ。

考えすぎ、気にしすぎ。

まるで深呼吸するように息をして、酸素をできるだけ多く体内に詰め込んで、明日子は彼の前を通り過ぎた。

「…え？」

振り返った明日子が見たものは、こちらを見ている彼の姿と閉まってしまった電車のドア。

何か…言った？

とてもとても小さな言葉ともとれない音が、明日子の耳に残った。

彼は、電車の進行と共に姿を消した。

第1章 - 4

聞き間違いだったのかな。

明日子はすで見えなくなった電車の後ろ姿を追いかけるように、伸びている線路の先を見つめていた。

彼の前を通り過ぎた瞬間、呟くように彼の声を聞いたような気がしたのだ。

でも私はあの人のことを知らない。

あの人だって私のことを知らないはず。

思い当たらないのに考えてばかりいても仕方がないから、明日子はようやくその場を離れて会社に行ったのだけ。

翌日も、その翌々日も。

明日子は彼を見かけた。

同じ時刻、同じ電車、同じ車両で。

やはり彼は自分を見ていた。

時には視線をそらすのだけど、それはしばしさまよってから、最終的には明日子に戻ってくる。

真っ直ぐに、明日子だけを見つめていた。

もはや明日子に彼が自分を見ているのかどうかを確認する必要はなくなっていた。

明日子自身も彼のことを意識している。

だからこそ、というべきなのか、彼の視線の『気配』を嫌というほど感じてしまうのだ。

ここまできたら、絶対私のことを何か思っている、のよね？

恨み？憎しみ？それともただのからかい？

私のこと、好き、とか？

まさか。

彼はどう見ても自分より年下。しかも近い年齢ではないようだ。自分で都合の良いことを考えてしまったことに苦笑した。

まもなく目的地の駅に着く。

そうすればこの視線とはお別れ。

そしてまた明日、彼と出会うの…？

たった3日、されど3日。

彼の物言わぬ視線は明日子の気持ちをかみ乱すのには十分な時間だった。

駅に着いても、明日子の足は先へ進もうとしない。

いつものように彼の前を通って、降りることができなかった。

そうこうしているうちに、電車のドアが閉まった。

ゆっくりと電車は走り出した。

ギョツとつり革を握ったまま、空いた方の手で手鏡を出して後ろを伺うと、

彼は驚いたような顔をしてこちらを見ていた。

何をしようと思ったわけではない。

ただ、金縛りにあったかのように動けなかっただけ。

初めて会社をさぼった。

仕事に集中なんてできない。

何事も経験不足な明日子に、自分の中で対処する術は生憎持ち合わせていなかった。

だったら。

彼がどこで降りるのか、見届けてやろうと思った。

彼は自分が何時にどこから乗ってきてどこで降りるのか知っている。不公平ではないか？それでいて彼はずっと自分を見ているのだから。

ねえどうして？

あなたはどうしていつも私を見ているの？

話しかけてくれればいいのにと、明日子はそこまで考えてしまっただけ、

全身を駆け巡る緊張に押しつぶされそうになりながら電車の揺れに身をまかせていた。

第1章 - 5

電車は引かれた線路に従い進行を続けている。

いつもならずでに駅に降り立ち、会社に向かっている頃なのに、今日は、明日子はまだつり革に掴まったまま電車の中にいる。

すべては、彼が気になるが故。

4日前までは存在さえ気付いていなかった彼なのに。

彼と彼女の間には流れる静寂な空気をかき乱すように途中の駅々で人々が乗降車を繰り返した。

そのたびに彼女はこっそり彼の様子を伺うのだけど、一向に彼が降りる気配はない。

この先、何かあったかな…。

腕時計を見た。もうとっくに会社は始まっている時間だ。

あとで電話入れなきゃと頭の片隅で考えつつ、終点までの駅を指折り数えた。

電車は走り続けた。

そして、ついに終点にたどり着く。

彼はまだ、電車に乗っていた。

終点到着を告げる車内放送が流れ、明日子は後ろを振り向いた。

彼は降りずにまだそこにいる。

振り返ったまま、明日子はそこに立っていた。

彼と真つ直ぐに、視線があった。

正直どうしたらよいのか分からなかった。

まさか終点まで来てしまうとは思っていなかったから。

ずっとここまで、彼が自分を見ているとは思っていなかったから。

他の乗客はすでにいない。

この電車は数分後には折り返しの発車になるとアナウンスが流れている。

明日子は半ばぼんやりしている頭でこのまま戻ろうと考えた。

だから、再び背中を返してつり革に掴まるうと思っただけだ。

「降りましょう。明日子さん」

突如名を呼ばれて明日子はおもわず声を漏らしそうになった。

自分を見ている彼が視線そのままに自分に寄ってきて、彼女の手をとり、そのまま引つ張って電車を降りたのだ。

明日子は訳の分からないまま電車を降りた。

それからしばらくして電車のドアは閉まり、さっき走ってきた線路の上を戻って走り出し、やがて姿が見えなくなった。

だが明日子はその様子をすべて見ていない。

彼に手をとられたまま、引きずられるように見せられたのは彼の背中。

握られている手が熱い。

頬が熱い。

鼓動が高まっている。

思えば、男性に手を握られたことなんて、多分これが初めて。

抱える鼓動に押しつぶされそうになりながらも彼に抗議の声一つあげもせずこうしているのは、

恐らく彼の『強引さ』によるものだけではない。

第1章 - 6

彼に引つ張られたまま改札を抜けた。

途端目の前に広がったのは見たことのない風景。

いつもこの路線を使つてはいるけれど、終点まで来たのは今日が初めてで。

見たことのないものたちに囲まれて吸つた空気にすら違和感を覚え
たその時、

明日子は改めて現状に気付いた。

彼に強く手を握られたままに歩く自分。

だがやがて、小さな広場を見つけた彼はようやく立ち止まる。

明日子の手も解放される。

自由を得たその手には、しばらくの間彼の体温と鈍い痛みが残つて
いた。

「…会社に電話、させてもらつてもいいですか？」

「あ…はい」

少し空いた間に耐えかねて明日子はためらいながらも彼を見て言っ
た。

働くようになってから嘘をついて休むのは記憶が正しければ今日が
初めてだったと思う。

それほどに社会に出てからの自分の生活は不変だったのかとぼんや
り考えながら携帯電話を取り出した。

上司には何ら疑われることなく休むことを認められた。

自宅ではなく、初めて来た土地で顔だけしか知らない男性と一緒に
いると知られたら、果たしてどう思うだろう。

明日子が電話している様子を彼はやはりじっと見ていた。

電車の中であつた二人の距離より、今の方が全然近い。

これまで背中越しでも十分に意識していたのだ。
今のそれがこれまでよりも強いものであったのはいうまでもない。

明日子は電話を切ったものの、顔を上げられずに目を伏せたまま
いた。

さて、これからどうしたものか。

といっても彼女は彼に強引に連れ出されたようなものであるの
だけだ。

だが、しばしの後に沈黙を破ってくれたのは彼の方だった。

「すみません…本当…いきなりで…」

「……」

「でも…不謹慎なんですけど、オレ、実は今すごく感動してるん
です」

「…?」

「ずっとこうしてあなたと話してみたかったんです」

上ずったような彼の声に、明日子はようやく視線を上げる。

彼の笑顔はとても穏やかで、ほんのり頬が染まっているように見え
たのは気のせいだろうか。

明日子は今までこのような表情を向けられたことがなかったため、
戸惑うことしかできない。

「ずっとって、いつから…?」

「去年の春からです」

「その間ずっと、私を見てたの?」

「はい…」

今度は彼が俯いてしまった。

「すみません。気持ち悪いですよね。でもオレ…初めて電車の中
で見かけた時からずっと…あなたのことが好きでした」

第1章 - 7

誰かと所謂『お付き合い』というものをしたことはないが、恋だけは何度も何度もしてきた。

初恋は近所に住んでいた幼馴染で、けれども彼は小学校に上がる頃に引っ越ししてしまったため、

気持ちを伝えることなく終わってしまった。

それから小学生になり、隣の席に座ったちょっとカッコいい男の子を好きになり、

いいお友達のまま、彼に別に好きな女の子がいると分かったら、今度は別の男の子を好きになった。

中学生になって、再び席が隣になった男の子を好きになった。

彼とはわりと仲が良かったから、友達から「絶対あんたのこと好きだよ」とおだてられて告白されるのを待っていたが、

やがて彼はクラスの違う明日子の知らない女の子に告白をした。

高校生になった時も同様。恋だけはしたがただ見ていただけだった。

その後短大に進学したがそこは女子大で、友人に誘われた合コンもことごとく断り続けた。

そして今。社内に好意を持っている男性はいないことはないが、

彼に恋人がいることは最初から知っていたので、恋というよりは憧れているのかもしれない。

今にして思えば、彼らに容姿や性格なども共通点はまずないといってよく、

強いていうならば、誰もが身近だった、ということなのかもしれない。

恋する経験だけは豊富だと自分では思っている。

が、恋をされた経験は全くをもっていない、とも思う。

多分自分には、大げさにいうならば恋を神聖化しているような部分があつて、だから例えば合コンのような自分から能動的に動くようなことはしなくなつたのだらうと思う。

サラサラと砂を落として決まつた時間を刻む砂時計のように、人は生まれて時期がくれば学問を学び、社会に出て、やがて結婚し、子孫を残して死んでいく。

それが当たり前のごとく定められた運命で、人によって差はあれどいずれは誰もがそのレールの上を歩く。

勿論自分も含まれる。

能動的になどならなくても、勝手に縁が相手連れられてきてくれるのだと疑いなく信じていた。

しかも今のこの時代、30代、40代で結婚なんて珍しいことではない。

自分がこの年齢に対して感慨深くなっているのは、20代と30代の境目だからと、なんとなく、しかし言い聞かせるように思っていたのだけだ。

正直、どうしたらいいのかわからない。

だって彼は自分にとって身近な人間ではなく、彼は自分を去年の春から見ていたと言っているけれど、明日子にとっては初対面と言っても過言ではない相手で。

好意を持たれて嬉しくないはずはないが、だからといって「ありがとう」と言つのも違うような気がする。

「私の、どこを好きになつてくれたの…?」

混乱する思考を少し整理して出てきた疑問。

その明日子の問いに、彼は「一目惚れです」と即答した。

「もう一つ聞いてもいいかしら。あなた…いくつ？」

「今年で20歳です」

彼は見た目は黒髪短髪で、あくまでも明日子の主観だけでも、容姿も悪くはない。

背もそこそこ高く、今の若者が好んで着そうな服を無難に着こなしている。

そんな彼がなぜ？自分を？

「分からないわ。どうして？どうして私なの？私は美人でもない、ただのOLよ。それに…私は今年30なの。10コも年が違う私をどうして？」

「どうしてって言われても、オレは多分明確な答えを持っていません。オレ、高校卒業して去年の春から電車で大学に通い始めたんです。その時電車に乗ってきた明日子さんを見かけて…」

「そういえば私の名前…」

「ああ。いつの時だったかな、明日子さん、会社のお仲間か誰かと乗ってきたことがあったんですよ。その時名前を呼ばれているのを聞きました…」

歯切れの悪い言葉を繰り返しながら、彼は照れ隠しなのか頭をガリガリかきながら、

これまでのように明日子を真っ直ぐに見据えて言った。

「そういえばオレ、まだ名乗ってませんでしたね。遅くなってますみません。オレ、戸田優貴って言います」

「ここまできたらもう全部言っちゃうしかないって感じですよね。明日子さん、オレと付き合ってくれませんか？」

「ダメよ」

明日子の即答に彼は、優貴はガツクリと肩を落とす。

その様子がはつきりと分かった故か、明日子の胸はチクリと痛みを感じただけで、

だって、どう考えたって。

「よく考えてみて。私とあなたじゃつりあわないわ。何も私と付き合わなかったって、もっとふさわしい人と…」

「ふさわしい人って？つりあわないって何が？それって明日子さんの思い込みじゃないですか。…って、もしかして恋人、いたりします、か？だから無理、だとか…」

「いないわよ！そもそも私…」

今まで誰とも付き合ったことないんだもの。

言いかけた口を慌てて閉じた。

それは多分、小さな見栄だった。

彼より10コ年上なのに、何も経験がないなんて、恥ずかしくて言えなかった。

彼は見た目は元より、話し方も所作も何ら嫌味なところがない。

今年20歳だというけれど、これまで色々な経験をしてきたのだろう。

むしろこれまで何もなかった明日子の方が珍しい。

「どうかしたんですか？」

「いいえ…」

劣等感のようなものを感じて、彼女は目を伏せた。別に彼に嫉妬のような類のものを感じたわけでは決してない。ただ。

「明日子さん。オレのこと、好きですか？」

「…え？」

唐突な問いだった。

今日初めて話した相手のことを好き？

彼女は彼に一目惚れはしていない。

明日子は迷うように、小さく小さく首を振る。

彼から小さな息が漏れた音がした。

が、すぐさま次の問いが降ってきた。

「じゃあ、オレのこと、嫌いですか？」

彼女は少し顔を上げた。

彼の視線と自分の視線が合わないように、彼の口元を盗み見る。

震えているように見えたのか気のせいか。

「いいえ。好きでもないけど、嫌いでもないわ」

相手が彼でなくても、大概一見の他人に対しては別段感情など抱かないものだ。

しかしそこに、ハハ、と小さく笑う彼の声。

「明日子さん。改めて言います、オレと付き合ってくださいませんか？」

「だからね…」

「明日子さんは年齢とかそういうこと言うけど、オレにとってはどうでもいいことなんです。オレはあなたが好きで、だから一緒にいたいと思う。働いてるあなたから見ればオレなんてまだまだガキだと思うけれど、それでも気持ちに正直でいたい」

最後に、彼は「嫌いじゃないって言うてくれたら粘ってみます」と付け加えることも忘れなかった。

明日子は笑うしかない。

「ちよつと。私を騙したわね？」

「違いますよ。オレは本当に明日子さんが好きなのです」

自分の視線と交わった彼のそれは、声のように笑ってはいなかった。

明日子は、迷いながらも頷いた。

第2章 - 1

あの後、明日子と優貴はそのまま帰りの途に着いた。

出かけて数時間しかたっていないのに帰ってきた明日子を見た母親は首を傾げたが、

彼女は適当な嘘をついてごまかし、部屋にこもった。

顔がとても熱い。

赤くなっているかもしれないと両手を頬に添えて家に入ったから、見かけた母親はもしかしたら何かいぶかしんでいるかもしれない。

カレンダーを見れば、今はまだ新年といえる時期で、

明日子の中では、今年も去年までと同様、変わらぬ年になるはずだった。

だからこそ、今年の誕生日を迎えれば、年齢の十の位が2から3に変わるのだと、

そんな細かいことまで考える余裕があったのだ。

だが今となってはどうだろう。

そんな彼女に、初めての恋人ができたのだ。

いや、恋人ではない、か。

彼のことは嫌いではないが、好きでもない。

一目惚れという感情を否定しないが、しかしそれは彼が自分に一方的に向けたもの。

向けられた対象である彼女が彼に惚れるか惚れないかはこれからである。

言うならば、100コ下の友達以上の、子？

これから私は、あの子と何をしていくのだろう。

手をつないで仲良くデート？

人目を忍んでキス？

見つめ合って、愛の言葉を囁いて、身体を繋ぐの？

これまで何一つとして色恋についての経験はしたことがないが、しかし、自分はすでにゆっくり時間をかけて駆け引きを楽しむような頃ではないとも思う。

周りの友達はすでに将来を見据えて、そして結婚という所謂『ゴール』にたどりついている。

自分もいずれ結婚はしたいと思っているが、だが相手は優貴ではないだろう。

自由に楽しい未来を思い描いてはいても、縛られる未来を想像してはいないだろうから。

そもそも、明日子自身が、彼をそのような対象には見られない。

彼はまだ、若い。

そのうち、現実気付くでしょうよ。

ふと、明日子は近くにあった鏡を取り出す。

鏡の向こうにいる自分が、なんだかここにいる自分を嘲笑しているように見えた。

翌日、いつもの時間にいつもと同じ電車の車両に乗り込んだ明日子を迎えたのは、

ニコニコ満面の笑みでそこにいた優貴だった。

明日子は圧倒されたような気がしながらも彼の隣に立つ。

「おはよう。なんだか悪いわ」

「気にする必要ないことですよ。オレが明日子さんに会いたいだけだし」

彼はまた笑んで、ようやく視線を少し彼女からずらした。

彼がこの沿線に住んでいることは昨日教えてもらった。

が、通っている大学へは違う電車を使うのだという。

いつも明日子が電車を降りた後、隣の駅でこの電車を降り、少し戻って乗り換えるのだという。

一応付き合うことになったのだから、もうこんなことしなくていいんじゃないの？と言ってみたのだが、

彼の口からは先ほどと同じ言葉が返ってきた。

そういうものなんだろうか。

確かに恋をしていた頃は、相手の姿をこの目に映すことが喜びだった。

けれど、自分の負担が増えることを承知で、というまではいかなかった。

彼を見知って、告白されて、今こうして隣に立って。

まだ1週間たっていないこの短い期間に色々ありすぎて。

明日子がこっそり息をついたのを優貴は気付かないまま、ただただ彼女をいとおしそうに見つめていた。

第2章・1（後書き）

申し訳ございませんが、現在無期限更新停止中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9459d/>

思い出

2010年10月20日17時29分発行